

源氏宮思慕の独詠歌

倉田実

はじめに

本稿は、『狭衣物語』の狭衣による源氏宮思慕の独詠歌を検討することを目的にしている。その独詠歌を、新潮日本古典集成本によって一覽すれば、次のようになる。

- | | | | | | | | | | | | | | | | |
|--------------------------------|--|--|---|---|---|---|--|--|---|--------------------------------------|--|---|---|---|---|
| <p>7 声たてて鳴かぬばかりぞ
(57頁)</p> | <p>6 我が心しどろもどろになりにけり
袖よりほかに涙もるまで
(51頁)</p> | <p>5 ほかさまに藻塩の煙なびかめや
浦風荒く波は寄るとも
(42頁)</p> | <p>4 夜もすがら嘆き明かしてほととぎす
鳴く音をだにも聞く人もがな
(41頁)</p> | <p>3 色々にかさねては着じ
人知れず思ひそめてし夜半の狭衣
(21頁)</p> | <p>2 うきしづみねのみなかるるあやめ草
かかるこひちと人も知らぬに
(10頁)</p> | <p>11 我が恋のひとかたならず悲しきは
逢ふを限りの頼みだになし
(236頁)</p> | <p>10 秋のしらべの声の限りに
忍ぶるを音に立てよとや今宵さは
(225頁)</p> | <p>9 燃えわたる我が身ぞ富士の山よただ
雪積もれども煙立ちつつ
(202頁)</p> | <p>8 跡枕とも責むるころかな
人知らば消ちもしつべき思ひさへ
(159頁)</p> | <p>17 思ひわびつひにこの世は捨てつとも
(12頁)</p> | <p>16 行き帰り心まどはす妹背山
思ひ離るる道を知らばや
(10頁)</p> | <p>15 恋しさもつらさも同じほだしにて
泣く泣くもなほ帰る山かな
(9頁)</p> | <p>14 谷深み立つをだまきは我なれや
思ふ心の朽ちてやみぬる
(248頁)</p> | <p>13 さもわびさする吉野川かな
わかぬなかとなりにしものを
(247頁)</p> | <p>12 吉野川浅瀬しらなみたどりわび
渡らぬなかとなりにしものを
(247頁)</p> |
|--------------------------------|--|--|---|---|---|---|--|--|---|--------------------------------------|--|---|---|---|---|

18	逢はぬ嘆きは身をも離れじ みそぎする八百万代の神も聞け 我こそ下に思ひそめしか	(14頁)
19	おぼろげに消つとも消ゆる思ひかは 煙の下にくゆりわびつつ	(136頁)
卷四 20	七車積むとも尽きじ	(172頁)
21	思ふにも言ふにも余る我が恋草は かく恋ひむものと知りてや	(318頁)
22	かねてより逢ふこと絶ゆと見て嘆きけむ ひき連れて今日はかざししあふひさへ	(327頁)
23	思ひもかけぬ標の外かな 思ふことなるともなしにいくかへり	(332頁)
24	恨み渡りぬ賀茂の川波 八島守る神も聞きけむ	(340頁)
25	逢ひも見ぬ恋まされてふ誤やはせし 神垣の杉の木末にあらねども	(341頁)
26	紅葉の色もしるく見えけり あれと見る身は船岡にこがれつつ 思ふ心のこはゆけるかは	(342頁)
		(343頁)

以上のうち、傍線を付してあるのは、前稿⁽¹⁾で源氏宮思慕をへ言はで忍ぶ恋として規定した、その範疇に入ると判断される表現である。これらの中には、「逢はざる恋」「忍ぶる恋」「言はで思ふ恋」とする方が妥当なものもあるが、これらの恋の要素を統合できるへ言はで忍ぶ恋とした方が狭衣においては適当であること、前稿の通りである。なお、独詠歌の色彩が強くても結果的に贈答歌になったり、返歌がえられなかったりしたものは、計上していない。また、前稿では総数を27首としたが、本稿では26首に修正し、また、指標となる表現についても訂正していることをお断りしておきたい。

以下、独詠歌の具体的な検討に入るが、全体的にはへ言はで忍ぶ恋のありようを指摘することに主眼を置いている。また、源氏宮に寄せるへ言はで忍ぶ恋の指標となる歌ことばには、似たような語句(類語)が何回も使用されたり、発想を同じくするなどの偏りが認められるので、そうした偏りに注意していきたい。「人知れず」「鳴(泣)く」「煙」「わぶ」「下に」「逢はぬ」などは、変奏されて偏りつつ複数使用されている。こうした変奏されて偏る歌ことばの使用は、物語展開のありようとかかわっているようであり、以下の章立てを必然化していくものと思われる。

一へ言はで忍ぶ恋の形成

卷一の独詠歌は、まさにへ言はで忍ぶ恋の形成に奉仕していると言える。なお、147などについては、すでに前稿で触れたので再確認になるが、了承されたい。まずは、物語の最初の歌でもある1になる。

1 いかにもせむ言はぬ色なる花なれば
心のうちを知る人ぞなき

(一・10頁)

「言はぬ色」「心のうちを知る人ぞなき」にへ言はで忍ぶ恋の様相が明瞭であったが、新たに注意したいのは、「言はぬ」である。「言はぬ」とは、当然のことながら声に出さないことだが、思いを声に出せば問題はない。しかし、声に出せないような恋であるからこそ苦しむのであり、「言はぬ」はまさに声にかかわってへ言はで忍ぶ恋の指標になる。そして、卷二の前半ぐらいまでは、こうした声や音にかかわったへ言はで忍ぶ恋の様相が表現されるようであり、ひとまず「言はぬ」とする声に出せないように注意して、以下順次見ていきたい。声や音はへ言はで忍ぶ恋の鍵語になるようである。

次は、源氏宮が改めて物語で紹介された後の、五月四日夕方、内裏よりの帰途、菖蒲を引く賤の男を見ての詠である。

2 うきしづみねのみなかるあやめ草

かかるこひぢと人も知らぬに

(一・21頁)

この歌に対しては、すでに「菖蒲引く賤の男に託して自らの忍ぶ恋の苦悩を吐露した狭衣の独詠」との指摘がなされている。へ言はで忍ぶ恋の指標は当然「人も知らぬ」になるが、この語句は前稿でも触れたように、「狭衣物語」全体が「知る」ことにまつわる物語であることよって多様に使用されるものの、源氏宮物語においては巻一の段階で特に頻用される鍵語であった。独詠歌に限っても、前歌に「知る人ぞなき」とあったが、この他にも、3「人知れず」、8「人知らば」という具合に類似した語句が使用されている。へ言はで忍ぶ恋は、まさに「人も知らぬ」なのであり、巻一での頻用は、この恋のありようを定着させる大きな役割を担っている。そして、この歌では、菖蒲の縁の「ねのみなかる」とかかわってくる。これは「根のみ流る」と「音のみ泣かる」との掛詞になるが、「人も知らぬ」と照応して、「音」は、忍び音ということになる。「人も知らぬ」わけだから、忍び音になるわけであり、ここでも「音」という声にかかわる音があることになり、次のような歌へと潜流していく。

狭衣は、翌日の五日になって、宣耀殿女御と一条院の姫宮に贈歌しているが、源氏宮思慕の代償という面もあり、2の歌と響いて、ここにもへ言はで忍ぶ恋が底流するようである。

・恋ひわたる袂はいつもかわかぬに

今日はややめのねさへなかれて

(一・24頁)

・思ひつつ岩垣沼のあやめ草

みごもりながら朽ち果てねとや

(一・24頁)

宣耀殿女御に贈る前者の「ねさへなかれて」は、2の歌の「ねのみなかる」と暗に照応していることは明瞭であろう。一条院の姫宮に贈る後者の「岩垣沼」は、「言は(ず)」を掛けて、秘めた思いの所在と口に出せない苦衷を表現している。源氏宮以外の女性への贈歌であっても、2の歌が位置していたことよってへ言はで忍ぶ恋の歌の様相

が暗に浮上するわけである。また、この二首とも「音」「声」が捉えられており、この贈歌の後でも、さらに「音羽の山」で「音」が言われることになる。すなわち、狭衣は「面杖つきて池の菖蒲の心地よげに茂りたるを眺め出でたまひて、音羽の山には、など口ずさみたまへる御声は」(一・25頁)とされるが、物思いの所在を暗示する身体表現の「面杖」の原因は、源氏宮である。へ言はで忍ぶ恋の物思いだからこそ、引歌未詳とされるが、「音」の所在を暗示させる「音羽の山」が口ずさまれている。この「音羽の山」は、これ以前にあったへ言はで忍ぶ恋を象る「音無しの滝」(19頁)とも響くものであろう。

次の3の歌に移りたい。天稚御子降臨のことがあって、女二の宮降嫁を帝から示唆されて、「紫ならましかば」と源氏宮思慕を確認して詠まれるものになる。

3 色々にかさねては着じ

人知れず思ひそめてし夜半の狭衣

(一・41頁)

この歌の「色々にかさねては着じ」に、源氏宮以外の女性とは結婚しまいと強い決意があることはすでに確認されている。³⁾その決意が「人知れず」とあるところに、前二首と同じくへ言はで忍ぶ恋の様相を提示している。この歌を詠んだ翌朝にも独詠歌があるが、それが4になる。

4 夜もすがら嘆き明かしてほととぎす

鳴く音をだにも聞く人もがな

(一・42頁)

大系本では和歌本文に違いあり、天稚御子降臨の磁場にあるが、集成本では源氏宮思慕の歌になること、これも前稿で触れた。ここで確認したいのは、自身になぞらえる時鳥の「鳴く音」が言われることである。ここは「泣く音」との掛詞になり、せめて忍び音に泣く声だけでも聞いてほしい意が働いている。また一方では、五月六日になっているのでこの「鳴く音」は「忍び音」ではなく、かん高く鳴く声であり、そのように思慕の言葉をはつきりと声に出したいとの思いが根底に据えられている。これは、歌の前にある、「(時鳥の声が)音にあら

はれにけりと聞きたまふ」とあつたことと見合っている。狭衣は、時鳥の鳴き声が自分のように忍び音ではないことだと羨望しているのである。しかし、1で「知る人」がいないと嘆じたように、ここでも「聞く人」の不在が嘆息されるわけである。

狭衣は、「暑さのわりなきほどは、水恋鳥にも劣らず、心ひとつにこがれたまふを知る人もなし」（一・43頁）とされつつ、ついに源氏宮の「御手をとらへて」思慕告白に及ぶことになるが、この「水恋鳥」も「音」にかかわる表現として注意されよう。独詠歌の検討ではないが、「音」にかかわるものなので見ておきたい。引歌としては、次の歌が挙げられよう。

・夏のひの燃ゆる我が身のわびしさに

水恋鳥の音をのみぞなく

（『伊勢集』I・21）

赤翡翠の異名ともされる水恋鳥は、水を痛切に求めるものとの印象があるようであり、そこからの命名と思われる。『夫木抄』（維九・動物部・水恋鳥・一二九〇三―五）には、この歌とともに次の三首が収載されているが、いずれも水を恋うことが認められよう。

・君をおきてことこひするは

おく山に水こひどりの水こふるごと

（俊頼）

・山里はたにのかけひのたえだえに

水こひどりの声きこゆなり

（西行）

・山の井のむすぶしづくやにごるらむ

水こひどりのあかぬけしきは

（寂蓮）

物語成立の時代より下がるが、水恋鳥の印象の差はあまりないと考えられよう。そして、水恋鳥は、水を求める時に、鳴き声をあげるとする印象もさらに加味できよう。西行歌はこの点から水恋鳥を詠んでいる。だから、水恋鳥が水を求めて鳴き声をあげるように、狭衣は「心ひとつ」に思慕の声をあげ、焦がれているとするのが先の部分になる。〈言はで忍ぶ恋〉に「声」がここでもかかわっているのである。こうした思慕の声は、狭衣において、胸の高鳴りとなって聞こえるものであ

り、「例の、胸はつぶつぶと鳴り騒げど、よく忍びかへして、つれなくもてなしたまへり」（一・44頁）とする語りも、声や音にかかわるとみることができよう。さらに、指摘すれば、思慕告白の口外を源氏宮に禁じて懇願する言葉の中にも、音にかかわる表現がある。狭衣は、「岩切りとほしははべるとも、音聞もあるまじきことと思ひ知りたれば、よも見苦しき心のほどは御覽ぜられじ」（一・46頁）と言っているが、声に出される「音聞」を危惧しているのは当然として、引歌表現の「岩切りとほし」にも音が響いている。

・吉野川岩切り通し行く水の

音には立てじ恋は死ぬとも

（古今集・恋一・四九二・よみ人知らず）

古今歌は、「岩切り通し行く水の音」の激しさから恋情の高まりを言いつつ、恋い死にしても、それを口には出すまいとするものであり、この意がそっくり狭衣の言辞には踏まえられている。恋情は「岩切り通し行く水の音」の比され、また、その音が世間に評判になることを危惧しているわけである。同じような表現は、源氏宮と母大宮が碁を打つ場面の前にも見られる。「岩間の水をつぶつぶと聞こえたまふべき人間のほどだにぞ、さらにありがたかりける」（一・71頁）とされるが、これも次の歌が指摘されている。

・ものをだに岩間の水をつぶつぶと

言はばや行かん思ふ心の

（『実方集』I・91）

この歌の「つぶつぶ」とは、「水が粒のようになって流れでるさま」などではなく、先に引用した「胸はつぶつぶと鳴り騒げど」と同じように、水がたつぷりあふれて音が高まるさまであり、また「つぶつぶと言ふ」でつぶさに言う意にも働いている。この事情は、そっくり狭衣の場合にも当てはまるのであり、「岩間の水をつぶつぶと」高鳴る意に恋情の高まりをよそえ、また、「つぶつぶと聞こえ」でつぶさに言う意にも働いている。「岩切り通し行く水の音」や「岩間の水」は、〈言はで忍ぶ恋〉の高まる恋情をよそえる音になるのである。

狭衣は、思慕の情を源氏宮に告白することとなり、これによって、へ言はでゝの状態は解消されたともいえるが、告白を知るのは源氏宮に限られ、また、源氏宮は二度と告白など聞かまいとして拒絶していくので、へ言はで忍ぶ恋のありようは基本的に継続されていく。厳密にはへ言ひて忍ぶ恋とでもした方が適切だが、へ言はで忍ぶ恋のありようを踏襲させることによって、狭衣の思慕の情は形を得ていくことになる。春宮によって源氏宮思慕が察せられるがその影響はなく、したがって、思慕告白以後もこの観点は妥当することになる。さらに独詠歌を検討していきたい。

次の歌は、女二の宮降嫁を受諾するよう父から勧められた後のものになる。

5 ほかざまに藻塩の煙なびかめや

浦風荒く波は寄るとも

(一・51頁)

これはへ言はで忍ぶ恋の要素は潜在して、3の歌にあった「色々にかさねては着じ」の延長に位置する歌になる。引歌としては、次の二首が有力である。

・須磨の海人の塩焼く煙風をいたみ

思はぬ方にたなびきにけり

(古今集・恋四・七〇八・よみ人知らず)

・浦にたく藻塩の煙なびかめや

四方の方より風は吹くとも

(新古今集・恋五・一三六一・よみ人知らず、惟成弁集)

後者には強い影響関係が指摘されるが、それ以上の指摘をする準備はない。いずれの歌も、「藻塩の煙」が「靡く」ことに愛情の移ろいを暗示することに於いて共通する。狭衣詠の場合は、源氏宮に寄せる思慕の情を暗示し、「浦風荒く波は寄る」ような困難があっても、思いは変えないと決意する歌となる。「煙」に思慕の情を託すこのあり方は、源氏宮思慕をいう「室の八島の煙」と通じることになる。また、「煙」は「火」によるものであり、その「火」は「思ひ」と掛けられて、強い愛情の

所在を表現していくことになる。ここには「火」は見えないが、「煙」や「火」は、後の8919の歌などにも使用されていく。しかし、源氏宮思慕はへ言はで忍ぶ恋を強いられることによって、「火」や「煙」は下にすすぶるあり方になるが、そうであっても「色々にかさねては着じ」とする決意の線上に位置して、強い思慕の情を表出するものとなる。

次の独詠歌は、春宮から源氏宮思慕を察せられて詠んだものになる。

6 我が心しどろもどろになりけり

袖よりほかに涙もるまで

(一・57頁)

心が「しどろもどろ」になるとは、春宮から源氏宮思慕を指摘されたからになるが、この歌の発想は、歌の前に、「人の問ふまでなりにけるよ」(一・56頁)とあったのと照応して、前稿でも引用した「忍ぶ恋」の兼盛歌から得ていよう。

・忍ぶれど色に出でにけりわが恋は

ものや思ふと人の問ふまで

(拾遺集・恋一・六二二)

兼盛歌は「ものや思ふと人の問ふまで」になったとして、忍ぶ恋が人に知られたのを嘆いたわけだが、狭衣詠はこの発想を交換し、「袖よりほかに涙もるまで」になって忍ぶ恋が人に知られたとしている。兼盛歌の発想に拠ることによって、狭衣詠はへ言はで忍ぶ恋になっていくのである。

次は、碁を打つ場面で、源氏宮が几帳の陰に姿を隠してしまつた後、「蟬のあやにくに鳴き出でたるを見出だしたまひて」とされて独詠される歌になる。

7 声たてて鳴かぬばかりぞ

も思ふ身は空蟬に劣りやはする

(一・74頁)

この歌もすでに触れたが、ここでも新たに指摘できることは、「声」とのかかわりであり、4「夜もすがら嘆き明かしてほととぎす鳴く音のだにも聞く人もがな」と同工であることである。時鳥の高く鳴く声、ここでは蟬の鳴く声であり、ともに恋情の高まりをよそえつつ、そう

はなり得ないへ言はで忍ぶ恋を象っている。

以上の七首が巻一になる。狭衣の源氏宮思慕は、物語冒頭部で「口なし」を指示されたことよってへ言はで忍ぶ恋になることが暗示されていた。「口なし」であるから「人知れず」になるのである。音や声とのかわりは必然であった。岩間の水の音や、時鳥・水恋鳥・蟬などの鳴き声は、おのずとへ言はで忍ぶ恋を象るわけである。こうした傾向が巻一の独詠歌には認められるのであり、へ言はで忍ぶ恋が形成されるのである。

二 源氏宮齋院卜定まで

巻二は、後半部で源氏宮が、女御入内の決定から転じて賀茂の齋院に卜定され、物語は転換していくが、それまでの関係性とあまり変化は見られない。巻二最初の独詠歌は、女二の宮との密通後に認められるが、これは源氏宮だけにかかわるわけではない。

8 人知らば消ちもしつべき思ひさへ

跡枕とも責むるころかな

(159頁)

「人知らば」は、「人知れず」などが反転したものであり、これもへ言はで忍ぶ恋の指標になること、巻一と同じである。この歌では、「消ち」にかかわって「思ひ」は「火」と掛けられ、消されるべき火に、禁断の「思ひ」がよそえられている。この「思ひ」は、「後枕とも責むる」とあるように、両方向から働くものであり、女二の宮との密通と源氏宮思慕になる。女二の宮とは密通によつてへ逢ひて逢はぬ恋になり、源氏宮とはへ言はで忍ぶ恋になるが、ともに「人知れず」の思いとして、交差する面を持つわけであり、狭衣詠はこの交差、連絡を示唆することになる。

先の5の歌では「煙」、この歌では「火」が使用されるが、次の歌になると、「燃え」と「煙」が両方明示されることになる。源氏宮が富士の山によそえた雪山に興じる段である。

9 燃えわたる我が身ぞ富士の山よただ

雪積もれども煙立ちつつ

(202頁)

こうした「煙」には、「室の八島の煙」「藻塩の煙」のイメージが挿曳され、源氏宮思慕の歌ことばとして機能していると見られよう。この歌は、源氏宮の詠んだ、次の歌と微妙な対応を見せている。

富士の山いと大きに作り立てて、煙立てたるは、げにいとをかしう見やられたまふ。宮、

いつまでか消えずもあらむ淡雪の煙は富士の山と見ゆるも

とのたまはすれば、御前なる人々、

(二・201頁)

雪山に「煙立てたる」とは、どのようににしたか不明だが、とにかく煙を立てたことで富士の山らしく見え、不死の名のように淡雪の雪山が消えないでほしいとしたのが源氏宮の歌になる。こうした雪山に興じる様子を垣間見て、狭衣は先の独詠に及ぶのだが、おのずと源氏宮歌に寄り添っていくようである。狭衣詠の「雪積もれども」は、「雪にも消えず」とする本文(『百番歌合』や大系本その他)の方が分かりやすく、源氏宮歌との対応関係も強まるが、意味的には集成本とあまり差はない。「雪積もれども」は、雪が積もるけれど消えずの意になるからだが、逆にこの本文の方が、意志的な感じを与えない分、秘めた思いの火の持続と、その表れとして煙となり、へ言はで忍ぶ恋歌らしくなる。指標として「雪積もれども煙立ちつつ」に傍線を付してみたのはこの点からなるが、狭衣の文脈に載せなければへ言はで忍ぶ恋としての面は、それほど強くない。とにかく、狭衣詠は、「燃え」で思いの火が暗示され、その表れとしての「煙」が使用されたのだが、こうした措辞が8の歌などにかかわって、へ言はで忍ぶ恋を支える思慕の強さを提示していくことになる。

春宮が即位して後一条帝の御代になるが、その大嘗会に際して「源氏の宮は女御代したまひて、やがて参りたまふべし」(二・223頁)という次第となる。物語は改めて狭衣の「思ひ忍び紛らはしつる心のうち」(二・223頁)、「かけても知る人なき御心のうち」(二・224頁)を確認して

いく。九月晦日ごろ、たまたま源氏宮の琴の音を耳にして、自身は笛を吹きながらその御前に出向いて行く。弾きやめた源氏宮から、その琴を勧められた狭衣は、思わず次の歌を口にする。

10 忍ぶるを音に立てよとや今宵さは

秋のしらべの声の限りに

(二・225頁)

「音にたてよとや」が、源氏宮から琴を勧められたことを言うが、「忍ぶる」思い、すなわち「言はで忍ぶ恋」の思いを、その音に立てて表せとおっしゃるのですと、難詰するような語調になっている。これは、思いを秘める苦衷の表れになるが、逆に、入内を前にして思わずほとばしった行き場のない恋情の所在を明確にしている。ここでは「音」を「秋のしらべ」としているが、これは、「逝く秋を惜しむ心と源氏宮との別離を惜しむ気持とを下に考えての事と思われる」(全書本補注)とする通りであろう。巻一で頻出した声や音とかわるるうちに、琴の音が「言はで忍ぶ恋」を象っている。

源氏宮入内は、後一条帝の父一条院の崩御によって延期となり、さらに賀茂の神託によって齋院に卜定されることとなる。思い余った狭衣は、源氏宮に縷々かき口説くことになるが、源氏宮は取り合わず、ますます絶望を深めて行く。女二の宮にも拒絶され、飛鳥井の君も失った狭衣は、さらに手の届かない神域に源氏宮が奉仕することになり、次のように独詠している。

11 我が恋のひとかたならず悲しきは

逢ふを限りの頼みだになし

(二・236頁)

狭衣には、「逢ふ」ことのできる女性はいなくなっている。「逢ふ」ことが「限り」果て、決着」とすることもできないでいる。この歌は、「ゆくへも知らずと詠みけむさへ、うらやましうおほされけり」に続いていて、次の躬恒歌が引歌であることが明示されている。

わが恋はゆくへも知らず果てもなし

逢ふを限りと思ふばかりぞ

(古今集・恋二・六一一)

狭衣の恋は、「ゆくへも知らず」とさえ言えない、逢はざる恋」なので

あり、その絶望がこうして表現されている。源氏宮と遠く隔たろうとして今、改めて「逢はざる恋」に終わろうとしている恋を反芻し、反芻する中で、失った女君たち、女二の宮や飛鳥井の君のことが喚起されている。源氏宮の齋院卜定は、物語が展開する大きな契機である。契機になるからこそ、物語は改めて女二の宮や飛鳥井の君との恋のありようを反芻させ、整理させている。このあたりから、源氏宮思慕は、「言はで忍ぶ恋」が基調とされつつ、「逢はざる恋」の絶望が言われ続けていくことになる。その表れの最初の独詠歌が、この歌なのである。その絶望ゆえに、狭衣は粉河詣でを行うことになる。

三 粉河詣で以後

粉河詣での段では、往路で二首、帰路で三首の、源氏宮思慕の独詠歌が認められる。粉河詣でについては、普賢菩薩の示現と飛鳥井の君の兄僧との邂逅という二点が主要な話題となり、また狭衣の不出家とも絡んで、この意義づけに関しては、幾つかの論がある。ここでは、こうした点には介入せず、狭衣詠の確認のみで取り敢えずは満足したい。一首目から見たい。

12 吉野川浅瀬しらなみたどりわび

渡らぬなかとなりにしものを

(二・247頁)

この歌に対しては、次の二首が引歌として指摘されている。

・天の川浅瀬白波たどりつつ渡り果てねば

あけぞしにける (古今六帖・一・七日の夜・一五九・友則)

・かはと見て渡らぬなかななるは

いはでももの思ふ涙なりけり

(後撰集・恋二・六三六・よみ人知らず)

後撰集歌は「いはでももの思ふ」とあるように、「言はで忍ぶ恋」の範疇に入る歌であり、この発想を狭衣詠は受けている。また、引歌の二首とも「渡る」に男女の逢瀬を暗示しているが、狭衣の「渡らぬなか」も

同じである。この点を強調すれば、逢はざる恋になる。前章で触れたように、この歌も、言はで忍ぶ恋が基調とされつつ、逢はざる恋の絶望が言われるわけである。まさに粉河詣での動機を提示している。

13 わきかへり氷の下にむせびつつ

さもわびさする吉野川かな

(二・248頁)

この歌に、古典全書本補注では、次の歌を引いている。

・冬川の上はこほれる我なれや

下にながれて恋ひわたるらむ(古今集・恋二・五九一・宗岳大頼)引歌とまでは言えないが、発想は関連していよう。「下に」は、言はで忍ぶ恋の指標であり、狭衣は、歌につづけて「上はつれなく」と口ずさんでいる。また、12の歌では、「たどりわび」とあったが、この歌にも「わびさする」とあって、「わぶ」が使用されている。「わぶ」は、苦悩・困惑・失意の意であり、恋歌では逢はざる恋を表現するのにふさわしい。往路の二首は、ともに言はで忍ぶ恋を基調としつつ、逢はざる恋の絶望が言われ、粉河詣でを必然化していることになる。

往路の歌に対して、帰路の歌になると、様相は違ってくる。

14 谷深み立つをだまきは我なれや

思ふ心の朽ちてやみぬる

(三・9頁)

植物の「をだまき」はわかりにくい歌語だが、これも前稿で「人に知られない思い」を表し、その為に朽ちてしまうものとしておいたが、この歌を念頭においたからであった。そして、この章では「朽ちる」とする発想に注意しておきたい。粉河寺では普賢菩薩の示現があったにもかかわらず、飛鳥井の君の生存という情報もあって出家は適わず、いわば挫折した思いで帰路についたのだが、その挫折感が、源氏宮思慕のありようと抱き合わせの関係となつてこの歌には表現されている。源氏宮思慕は、逢はざる恋として挫折していたが、挫折してもなお執着せざるを得ない愛執がここに確認されている。愛執の確認自体も、挫

折の確認にはかならず、源氏宮思慕は二重に挫折しているのである。こうした挫折感が、不出家の挫折感と相俟つて、「朽ちる」とする思いをもたらしめている。粉河詣で以降に明らかになる鍵語になり、この挫折の表現は、さらに帰路の残りの二首にも認められる。

15 恋しさもつらさも同じほだしにて

泣く泣くもなほ帰る山かな

(三・10頁)

16 行き帰り心まどはず妹背山

思ひ離るる道を知らばや

(三・12頁)

15の「泣く泣く」や、16の「心まどはず」「思ひ離るる道を知らばや」は、出家と思慕の二重の挫折の表現であろう。また、15の「恋しさもつらさも」とする措辞は、思慕とその挫折の確認である。16の「行き帰り心まどはず妹背山」も思慕の挫折と思慕の確認の両様の意が込められて「まどはず」とされている。こうした出家と思慕の挫折は、帰宅しての独詠歌にも変容されて認められ、粉河詣でを意義づけることになる。

17 思ひわびつつひにこの世は捨てつとも

逢はぬ嘆きは身をも離れじ

(三・14頁)

狭衣は、「つひにこの世は捨てつとも」として、将来の出家が可能であると仮想しているが、出家できない現在の確認でしかない。出家が挫折していることの、逆説的表現になる。そして、「思ひわび」で先に指摘した「わび」が使用され、「逢はぬ嘆き」が言われている。すなわち逢はざる恋である。狭衣の粉河詣での帰路の歌は、逢はざる恋の確認に、さらに出家の挫折が添加されて、今後の狭衣像を指示しているのである。

帰京後の物語は、女二の宮所生の若宮、今姫君、飛鳥井の君、一品の宮などのかかわりが展開し、しばらくの間、源氏宮が正面に据えられての語りは見られない。賀茂の祭の段になって、華麗な行事を中心的に語る中で思慕の様子が示される。

18 みそぎする八百万代の神も聞け

我こそ下に思ひそめしか

(三・136頁)

賀茂の祭にちなんで「みそぎ」「八百万代の神」などの措辞が使用され、賀茂神と、その斎女となった源氏宮、そして狭衣自身の関係性から現況が捉えられている。いはば三角関係が描定されて、自分の方が源氏宮を先に思慕していたのだとして、その占有を主張している。しかし、この主張も空しいものであり、また、「下に」とあるようにへ言はで忍ぶ恋でしかなかったことを確認せざるを得ないものとなっている。狭衣は女二の宮との関係も修復できず、その尼姿に後悔と自責の思いを深め、再び出離の思いを強くしていく。賀茂の相嘗祭では、源氏宮思慕を改めて確認しつつ、出離の近いことを確信している。

19 おぼろげに消つとも消ゆる思ひかは

煙の下にくゆりわびつつ

(三・172頁)

ここでも「下に」とあつてへ言はで忍ぶ恋であることを確認している。そして、その恋は、「わぶ」ものでしかない。「消つ」「消ゆる」「煙」は、「思ひ」と掛詞になる「火」と縁語関係を構成して、強い思慕の情の表出であること、589の歌などと共通するが、それは「下にくゆりわびつつ」であり、否定的な響きを保持してしまっている。出家を決意した狭衣の心境がここに反映していることになる。

以上が、卷三までの独詠歌になる。粉河詣で以後は二首のみの独詠歌しかなく、物語の主題を担う存在は女二の宮に移行している趣である。出家への志も粉河詣での時とは相違して、尼姿の女二の宮に抱える面が強くなっている。しかし、そうであっても、根底にあるのは源氏宮思慕であり、19のような歌は必然なのである。

四 〈逢はざる恋〉への回収

卷三末の出家行は、卷四冒頭の賀茂神の神託があつて阻止され、狭衣は再びつらい現実に戻ることになる。父闕白は、狭衣を二度と出家させまいとして、賀茂神に願をかけ、参拝することになる。同行した狭衣は、次のように独詠している。

神もなほもとの心をかへりみよ

この世とのみは思はざらなむ

(四・198頁)

この歌の解釈には二通りあり、源氏宮思慕の歌と解するのが集成本であり、大系本は本地垂迹思想を背景において解している。18に「みそぎする八百万代の神も聞け我こそ下に思ひそめしか」とあつたことと関連させれば、源氏宮思慕にかかわるものとするのができ、「もとの心」は、「本地」の意ではなく、賀茂神より先にもともとあつた思慕の情を指すことになる。しかし、思慕の文脈だと「この世とのみは思はざらなむ」の収まりが悪くなる。思慕の情が来世までのものとする把握はこれまでになく、いきなりこうした措辞があることに脈絡がつけられない。ここは、大系本のように本地垂迹思想を背景におけば、出家を阻止された賀茂神への恨みの歌として収まりがつく。神も「もとの心」であつた仏の教えを思いなさい、仏の教えは来世への教えであり、賀茂神も「この世」のことだけ思わないでほしいとしていることになる。出家を阻止されこの世に止められた恨みをいうわけである。こうすると、歌の前にあつた、「しひて憂き世にあらせまほしくおぼすらむ神の御心のありがたきものから、かたがたにつらきかたにぞ進みたまひける」(四・198頁)と整合することになる。

「神もなほ」の歌を以上のように解すると、卷四での源氏宮思慕の独詠歌は、天照御神の神託によつて、狭衣の即位が決定した以後になる。即位に対して狭衣は、「ふさはしからぬ身の宿世とおほし嘆かるるなかにも、齋院を見たまつりたまはむことの、今はありがたうなりぬべき口惜しさは、今さらに言ひやるべきかたなければ」(四・313頁)とさし、齋院を訪問することになる。即位してしまえば、二度と対面さへできなくなるからである。その思いを贈歌に託して帰途につくことになるが、行き違う力車を見て次のように独詠している。これが卷四の最初の源氏宮思慕の独詠歌である。

20 七車積むとも尽きじ

思ふにも言ふにも余る我が恋草は

(四・318頁)

この歌の本歌は、明白である。

恋草を力車に七車つみても余る我が心かな

(古今六帖・二・車・一四二二・ひろかはの女王)

即位を前にして、改めて源氏宮に対する筆舌に尽くしがたい思慕の情を対象化している。こうした恋情の対象化は、一方で「形代の恋」として進行している式部卿宮の姫君の物語を必然化していくことにもなるが、このあたりで物語は、源氏宮思慕を收拾せざるを得なくなっていることにもなる。それを端的に表現しているのが、次の即位後の歌になると思われる。

21 かく恋ひむものと知りてや

かねてより逢ふこと絶ゆと見て嘆きけむ

(四・327頁)

上二句は類型的な措辞になるが、この「かく」の指示する内容は、20の歌の「思ふにも言ふにも余る」とするあり方になる。ここでさらに注意したのは「逢ふこと絶ゆ」であり、この語句は、「逢はざる恋」を表象する措辞とすることができ、源氏宮への告白場面を語りつつ、「言はで忍ぶ恋」として牽引してきたのがこれまでの物語であったが、狭衣即位を境にして、両者の関係を「逢はざる恋」として回収しようとしているものと思われる。源氏宮にも「見るを逢ふにてはやむべきものとおぼしめしつるを」(四・315頁)とされて、「逢ふ」ことの不可能性が確認されていたが、狭衣にも「逢はざる恋」として確認させているのである。「逢はざる恋」とは、恋人と逢えぬ苦悩を詠む歌とされるのである。「逢はざる恋」は、恋人と逢えぬ苦悩を詠む歌とされるのである。即位後の狭衣の場合には、その苦悩を絶望・懊惱・煩悶・嘆訴などで象るのではなく、物語の終焉に向けて、恋着の表出でありつつ憂愁の念のうちに諦観的に表現されるようである。ここでは、あまりあるほど恋しくなることを以前から知っていたから、「逢はざる恋」を嘆いていたのかとして、過去の思いに測鉛を下ろしつつ、現況を把握している。これまでの「逢はざる恋」の嘆きは、独詠歌では、11「逢ふを限りの頼みだになし」、17「逢はぬ嘆き」などとされて、絶望・煩悶が語られていた。しかし、ここではそうした「逢はざる恋」であったこ

とを、回想にうちに諦観していよう。これ以上の関係性の発展が望めない時、恋着を恋着として語りつつ、過去へのまなざしを示して、憂愁の念で覆われていくわけである。この事情は、翌年の賀茂の祭での独詠歌にも認められる。

22 ひき連れて今日はかざししあふひさへ

思ひもかけぬ標の外かな

(四・332頁)

狭衣帝が、「近衛府の使のしたてて参るをも、うらやましく見送らせたまひて」詠んだものになる。かつての祭の日には、「葵」をかざして「逢ふ日」があったものだが、今は奉幣使を差し向けるのみで、「標の外」になってしまったと帝位にある境涯を嘆じている。過去を想起することと、ここでも「逢はざる恋」にあることを反芻している。歌に続け、「とおぼしつづけてながめさせたまへる」とあるように、この歌は「ながめ」の所産なのであり、21の歌も「つくづくとながめ入らせたまひても」として詠まれていた。憂愁の念で覆われた「ながめ」も主題化されて、狭衣の源氏宮思慕は「逢はざる恋」として回収されつつあるわけである。

この回収作業は、連続して配置される以下の四首でそれなりの完了を示すようである。年が変わったの九月、賀茂の行幸時の独詠歌である。

23 思ふことなるともなしにいくかへり

恨み渡りぬ賀茂の川波

(四・340頁)

「思ふことなるともなし」は、「逢はざる恋」のありようである。そうした恨み心を持ちつつ、即位する前に幾度も行き来した賀茂川に思いを馳せている。ここにも「逢はざる恋」が把握されつつ、回想のうちに諦観されていよう。狭衣帝は、上賀茂社に回って、さらに独詠していく。

24 八島守る神も聞きけむ

逢ひも見ぬ恋まさされてふ袂やはせし

(四・341頁)

「神も聞きけむ」は、18「みそぎする八百万代の神も聞け我こそ下に思

ひそめしか」と照応している。そして、「逢ひも見ぬ恋」も「逢はざる恋」になる。

翌十月の平野行幸では、

25 神垣の杉の木末にあらねども

紅葉の色もしるく見えけり

(四・342頁)

と独詠歌している。ここには「逢はざる恋」の措辞はないが、「神垣の杉」に齋院を幻視し、かつて見た「紅葉の色」とだぶらせて、「逢はざる恋」を確認させていよう。船岡山では、さらに次のように独詠している。

26 あれと見る身は船岡にこがれつつ

思ふ心のこはゆけるかは

(四・343頁)

「あれと見る」は、あれが齋院だと遠くみるということであり、かつて間近に見た齋院との距離が言われている。この距離感「逢はざる恋」を象ること明瞭であろう。狭衣帝は齋院を「あれと見る身」でしかないのである。

物語は、この後、これまでの登場人物を総動員するかのようにしてその動静を語り、終焉に向かっている。その終焉が目睹されつつ、23から26の独詠歌は連続して位置していた。これは源氏宮の物語を回想させつつ、「逢はざる恋」として回収させていることを意味しよう。「逢はざる恋」として展開してきた源氏宮物語は、当然のごとく「逢はざる恋」として終焉したのであった。

注

(1) 拙稿「言はで忍ぶ恋」の狭衣―源氏宮思慕の物語表現―(『大妻女子大学文学部三十周年記念論集』一九九八年三月)

(2) 後藤康文氏「『狭衣物語』作中歌の背景(一)」(『文献探究』22、一九八八年九月)。

(3) 鈴木泰恵氏「飛鳥井の物語の位相―源氏宮思慕中心の物語との関わりにおいて―」(『中古文学論攷』7、一九八六年十月)。

(4) 注(2)に同じ。

(5) 『和歌大辞典』(明治書院、一九八三年三月、滝沢貞夫氏執筆)には、「勅撰集にこの題明示の歌が六九首ある。恋人と逢えぬ苦悩を詠む歌題。我が恋の空しさ、相手のつれなさを嘆く詠。なお逢うことを期待する歌もあるが、題意が定着してから以後は逢うに命を代えんとする歌が顕著となる。絶望・懊惱・煩悶・嘆訴はあっても悔恨・怨嗟は見当たらない」とある。

(6) 後藤康文氏「『狭衣物語』作中歌の背景(二)」(『文献探究』23、一九八九年九月)。

(7) 鈴木泰恵氏「失墜する狭衣像・その造形方法―卷三初頭の記述をめぐって―」(『源氏物語と平安文学』第一集、早稲田大学出版部、一九八八年十二月)に、「源氏宮故の出家行であり、またそれ故の現実回帰である、という文脈を成立させている」とする指摘がある。